

C-57 ブラウス袖つけの縫代と縫目強さに関する研究(オ3報)

東海学園女子短大 オ辻 啓子 伊藤きよ子 西條セツ 西村正代

目的 最近ゆとりの少ないブラウスやシャツを着用する傾向にあり、袖つけ縫目がほつれたり、布が破れたり、縫糸による目引きを起す。前報では縫目強さと縫代長の関係について素材別・組織別に検討した。今回は上肢の運動による袖つけ縫目に力のかかる部位を検討し、その部位について前報で縫代の滑脱のみられたポリエステル織物について引張試験を試みたので報告する。但しオ3報は後袖つけ縫目のみとする。

方法 (1) 被験者に胸囲、背幅、アームホール、袖幅、袖口等にゆとり量の少ないブラウスを試着させ、上肢の運動にともなう袖つけ縫目部分の伸長変形を高速度カメラにて撮影した。

(2) 伸長変形の著しかった部位すなわち身頃の脇縫目から2.5cm間隔の6部位について、平織、綾織、朱子織の3種について引張試験を行った。針目は6目/cm、縫糸はテトロン糸60番を用いた。

結果 (1) 袖つけ縫目は上肢の運動すなわち両上肢90°前拳から直上上拳、両上肢90°外拳から直上上拳の運動に最も影響を受け、脇縫目から背幅にかけての部位の伸長変形が最も大きい。

(2) 縫目の引張試験では、強度は組織、部位の間に大差はみられないが、伸度は身頃54°・袖45.5°、身頃23°・袖41.5°の組み合わせの場合に大きい。縫目の破断状態は布の性状、袖つけ縫目の部位により異なる。